

仮称：X場の正体は？(3)

渡辺 満（静岡県）

§0 はじめに

「目を当てて、そこからのぞく、遠くの異様な世界は、妙なわけだが、誰も知らない。
… 夜の酒場の壁に穴がある。」（萩原朔太郎の詩の1節より）

前回に続き、X場に関する実験を進めた。

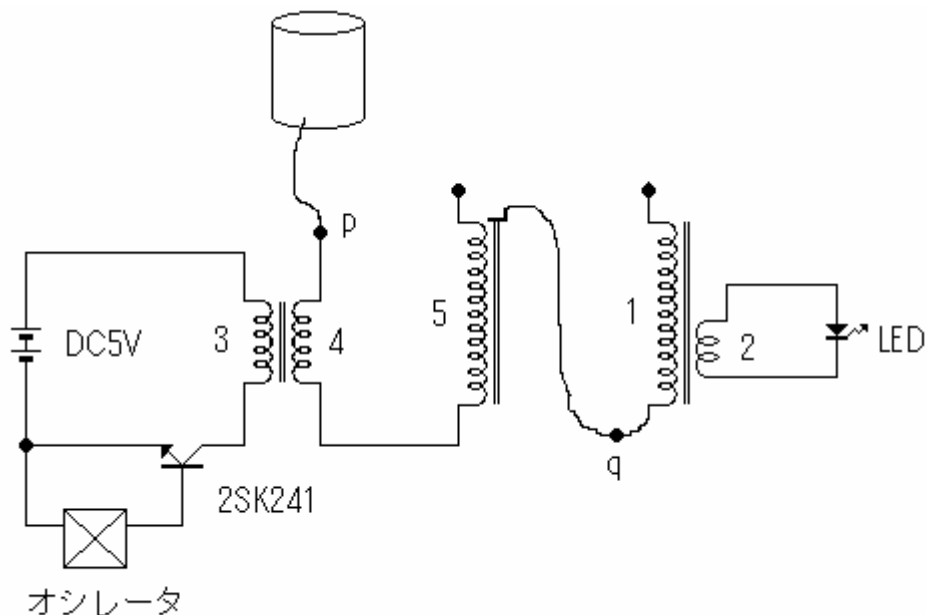
今回は、X場が一体何であるか、その正体を実験で、推定することが目標である。

すでに述べたように、最初は、モノポールのようなものを想像していたが、
しかし、これから述べる §3の結果により、その可能性は低くなった。
その代わりに、候補に上がってきたのは、
「何らかの理由で、超伝導性を獲得した電子」である。

まったく、とんでもないものが、出て来たわけで、
これは見方を変えると、‘常温超伝導’と言えるかもしれない。
まさに、‘ヒョウタンから駒’だ。

「X共振,X粒子,X波,X流,X放射」という言葉を、X場の別表現として、適時使用する。

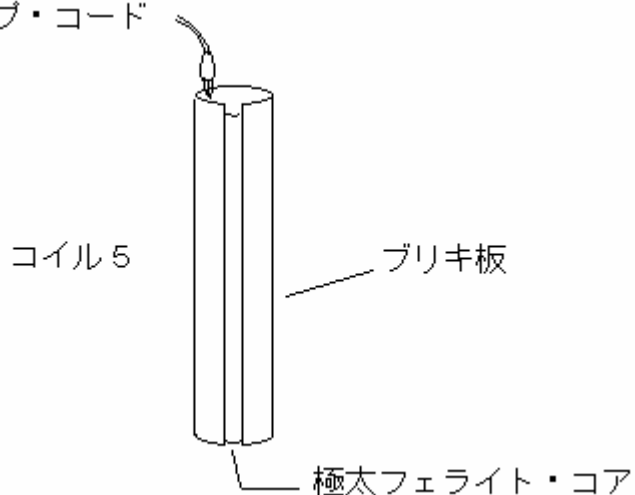
§1 コイルと回路



前回の「仮称:X場の正体は?(2)」の回路に、新たにコイル5を追加した。

コイル5は、コイル1に用いたのと同じ極太フェライト棒に、洋菓子の空き缶から切り取ったブリキ板(100mm×210mm)を、カップ寿司の海苔のように巻つけ、さらに、その上に薄い紙を巻き、その上に、0.8mmφのポリウレタン銅線 10m を、コイル1と同じように巻いた。(約 95 回)

クリップ・コード



このブリキ板は、内の極太フェライト棒より10mm 長いので、その先端が飛び出している。その飛び出したブリキへ、クリップ付きコードをはさんで、その他方(q点)へ、コイル1をつないだ。

意外かもしれないが、このように、コイル1はコイル5のブリキ板へ、つないでいる。

§2 X流

さて、前回と同じように、オシレータから高周波電流を流し、周波数を変化させていくと、やはり、ある1点(約3MHz付近)でピンポイントに、LEDが光る。他の点では、光らない。

いや？しかし、これは不思議なことである。

コイル1とコイル5は、普通の意味で、電氣的に絶縁されている。

コイル5へ巻いた導線は、ポリウレタン銅線であるから、当然、ポリウレタンでコーティングされている。また、ブリキ板も、何かのコーティングが施されている。

さらに、ブリキ板の上には、紙も巻いてある。

従って、コイル5からコイル1へ、普通の意味で、電流が流れるわけがない、のである。

(テスターで試してみたが、導通はなかった。)

これは、どういうことだろう？ここには、魔物が潜んでいる。

そこで、「これでもか！」と、

コイル5とコイル1をつないでいるクリップ・コードを、外してしまった。

すると、さすがにLEDは消えてしまった。

ということは・・・

少なくとも、このクリップ・コードを通して、何らかの電氣的なものが、コイル5からコイル1へ流れている、それは間違いないようである。

次の§3で述べるように、これはモノポールではない、と判断できる。

そこで、こう考えるしかない、と思った。

「コイル5とコイル1の間には、確かに絶縁物が入っているが、この電氣的なものは、その絶縁物をも通り抜けてしまうのだ。」

それなら、それは超伝導だろう。

電荷を持った素粒子は、電子以外にも、陽子を始めとして、色々あるらしいが、この状況に馴染まないものを除外すれば、

これは、「何らかの理由で超伝導性を獲得した、電子である」そう考えた。

イメージを膨らませて、

“高周波振動させられた電子群は、ボーズ・アインシュタイン凝縮を起こして一体化し、マクロな波動関数となって、超伝導性を獲得、多少の絶縁物なら通り抜ける。

これが、コイルのコア内に入ると、「仮称：X場の正体は？(1)」に示したように、マクロな定常波を形成する。”

本当にそうなのか、これから徐々に、検証していく必要があるだろう。..

(ちなみに、コイル5のクリップとブリキ板の間に、ビニール・テープをはさんでみたら、

LEDは点灯しなくなった。これくらいの絶縁物では、だめらしい。

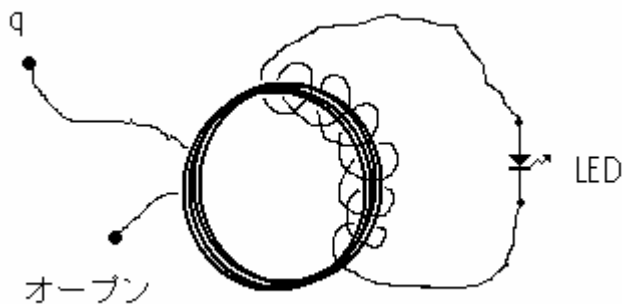
しかし一般に、絶縁物が入っても、その面積が大きければ抵抗が減少するらしく、Xは通ることが、実験でわかっている。

例えば、コイル5の巻き線とブリキ板の間は、接触面積が大きいので、Xは通っている。)

§3 モノポールではない

当初は、「もしかすると、Xはモノポールではないか？」と考えたりもしたので、それを確かめるため、次のような実験をした。

前述した回路のq点の、コイル1を外して、次図のようなコイルを取り付けた。



0.8mmφのポリウレタン銅線10mを、直径5cmの輪状に巻き、それを、くぐらせながら、適当な導線をグルグルと10回程、ヘビのように巻きつけ、その先へLEDを付けた。

これを、回路のq点につないだ。(片方はオープンである)

もし、コイル5からモノポールが出ているならば、

モノポールは、この輪状のコイルに流れ、その回りには電場が発生する。

すると、ヘビのように巻いた、もう一方のコイルに、起電力が生じ、LEDが点灯する。

例によって、オシレータから高周波電流を流し、周波数を変化させてみたが、しかし、どのポイントでも、LED は光らなかった。

§ 4 あとがき

改めて、§ 1の回路図を眺めて見ると、トランスの左側は電子回路といえるが、右側は電子回路というより、むしろ、X回路とでもいうべきだろう。

ここでの電氣的な流れは、電位差によるものではなく、液体や気体のように、自らの圧力に押し出されて流れる、流体のそれのようだ。

X流体とでもいうべきか。

2013年5月発行 V1.0

著者:渡辺 満, 発行者:渡辺 満

Copyright 渡辺 満 2013年